

公共的空間の評価構造に関する基礎的研究

李, 静雅

<https://hdl.handle.net/2324/6787626>

出版情報 : Kyushu University, 2022, 博士 (工学), 課程博士
バージョン :
権利関係 :

氏名	李 静雅			
論文名	公共的空間の評価構造に関する基礎的研究			
論文調査委員	主査	九州大学	教授	大井 尚行
	副査	九州大学	教授	田上 健一
	副査	九州大学	准教授	井上 朝雄

論文審査の結果の要旨

この論文は、利用場面によってニーズが異なれば異なる空間を選択して利用すると考えられる公共的空間を対象に、ニーズを把握して空間設計を行うための新たな知見を得ようとしたものである。評価構造を抽出するための代表的な方法である評価グリッド法を使用するにあたり、対象に合わせた改良を新たに加えて、以下のふたつの問題点を克服している。すなわち回答者に場面想定をまかせて抽出した評価構造は、回答者が想定した場面に限定された評価構造の一部にすぎない可能性があるが、想定された場面が不明であること。そして、場面ごとに異なる可能性のある空間に対する評価構造全体を把握しようとする場合には、個人の中でも多様な利用場面に応じて生じる可能性のある違いを包括的に考慮した評価構造の抽出方法を探る必要があること、である。

このためにまず、公共的空間を対象として利用場面を想定して抽出した評価構造の比較考察を行い、上記の問題に対応した新たな知見を得ている。また、抽出した評価構造をもとに、公共的空間に対するニーズのチェックリストを提案している。

第一章では、本研究の背景と目的、関連する既往研究および筆者らが行ってきた研究を整理し、本研究に至る経緯が述べられている。また、公共的空間に関する研究や、評価グリッド法が提案された経緯、関連する概念、評価構造に関する研究についても整理されている。その上で、本研究で扱っている研究対象とした評価構造と公共的空間が定義され、設定した課題が示されている。

第二章は、調査方法についてである。本研究では、利用者のニーズを把握するための評価構造を抽出する手法として、半構造化インタビュー手法である評価グリッド法が用いられた。評価グリッド法の手順に基づき、利用場面を指定しない場合と利用場面を指定した場合の両方の調査が実施された。調査対象はさまざまな場面で利用できる公共的空間であって、回答者にある程度の共通認識があると考えられる公園とカフェとされた。回答者は、ある程度経済的・精神的に自立しており、相対的に時間が自由に使えて行動範囲が広いことから大学生と大学院生に限定されている。利用場面を指定せずに行ったインタビューでは利用したいかどうかの評価基準であり、利用場面を指定して行ったインタビューは、利用場面を一人で利用する場合、家族と利用する場合、友達と利用する場合、恋人と利用する場合の4つの場面に適しているかどうかの評価基準である。

第三章は、インタビュー調査により得られた結果について述べられている。評価グリッド法によるインタビューの結果として、まず回答者ごとの評価構造図が作成された。利用場面を指定せず得られた評価構造をまず個人単位にまとめ、個々の回答者が求めるものが整理された。13名の回答者中、2名の回答者については複数の利用シーンを想定しながら回答したことがわかった

一方、多くの回答者は空間の要素に対して評価したが、具体的にどのような場面を想定して回答したかは、評価構造図からは判断できないとされた。利用場面を指定して抽出した評価構造の分析では、まず回答者全員の評価構造図を利用場面ごとにまとめた全体評価構造図を作成し、比較されている。ここでは、一人で利用する場合は「程よく閉鎖的」、恋人と利用する場合は「ロマンチック」といった特有項目がみられ、項目間のつながりが利用場面によりやや異なっていることが見いだされている。次に個人評価構造図の個人内と個人間のそれぞれに対し、評価項目とつながりの相違についての比較が行われた。結果として、同じ回答者でも利用場面によって類義だが異なる表現がみられたほか、利用場面により対照的な意味を持つ項目と同じ項目に対して関連させる回答がみられた。類義だが異なる表現としては、例えば「会話」に関する表現として「団欒できる」「おしゃべりできる」が挙げられ、同じ会話という行為であっても、異なる表現が使われていることから回答者ニーズに違いがある可能性が示唆された。また、対照的な意味を持つ項目については、一人で利用する際には「狭い」が「落ち着く」とつながっているが、家族と利用する際には「広さがある」が「落ち着く」とつながっているというような回答が同じ回答者の評価構造の中にみられ、個人の中でも利用場面によって求めるものが異なる場合があることが明らかになった。さらに、同じ表現の項目が上位・下位とのつながりから異なる意味で使われていると思われるものがみられ、回答者の意図を理解するには、関連する項目から汲み取ることの大切さも示唆された。

第四章では、評価グリッド法により得られた結果に基づき、利用場面ごとに多く出現した項目を集計し、利用場面の間に見られたニーズの相違を把握するためのチェックリストが提案された。チェックリストの各評価項目は全体評価構造図の中で他の項目とのつながりが分かっているため、全体評価構造図からチェックリストにある項目ごとに、抽出した項目とつながっている項目を示す補足資料として整理された。このチェックリストは公共的空間における利用場面の間に見られたニーズの違いなどのデータに基づくものであり、利用場面を考慮した設計に有用であると考えられる。

第五章は、結語として本研究全体にわたって調査結果から得られたものがまとめられている。また、今回の調査の限界および今後の展望についても述べられている。今回の調査により、公共的空間における評価構造の把握には利用場面を指定することが必要な場合があることが示された。調査対象の公園やカフェは、さまざまな利用場面で利用できる公共的空間と想定されるが、利用場面の間にみられたニーズの違いやニーズの把握方法そのものが設計場面で活かされることで、画一的でなく、より多様な人々のニーズを満たす公共的空間のデザインにつながると考えられる。

全体として、論文を構成する主要な内容は水準に達しているものと考えられ、予備審査で指摘があった、対象空間や利用場面の位置付けの記述やエレメントの影響などについての考察も追記されていることから、3名の審査委員の合議により、本論文は博士（工学）の学位に値すると判断された。